



2006年

SORA 15号

晴夜 (15) | 1

柴田 佐知子

蟻地獄すべりし跡は砂が消す

早乙女の立派な脚でありにけり

祭なり鼻筋通る馬も出て

進むとき蛞蝓すこし痩せにけり

麦秋や火の衰へぬ殉教図

蔵解いて蝮騒ぎとなりにけり

虫干の色の中なる母若し

水打つて家風家訓のなかりけり

涼

高倉和子

青桐や父は正しきことを言ふ

振り向かず猫の出てゆく薄暑かな

草矢打つあつけらかなとした空に

蟻の列神社の裏へ回りをり

青年の手足の長く梅雨に入る

船虫の一直線に消えにけり

裏返るばかりで飽かれ浮人形

青空を蹴つて噴水太りたる

日本の端に住みゐる涼しさよ

夕立の勢ひのままに答へけり

本堂に座り直して蚊を打てり

いくたびも水打つ母を待ちながら

古井戸に生ぬるき闇終戦日

母校への道の記憶に夏草も

八月の大河に雲のあるばかり



夕映ゆる

中田みなみ

黒きもの着て蛍を見に行かむ

七夕竹曳きずる音の曲がりゆく

銀河濃し糊の利きたるシャツに替へ

神鈴と風の音のみ蟻地獄

墓詣蝸牛にも水かけて

原爆忌固くなりたる足の爪

しがみつく蔓を外して墓洗ふ

大いなる海よ空よと夏帽子

信じます外して下さいサンダラス

行きずりに桶の西瓜をこづきたり

鳶笛のぴいひよろが好き青岬

滴りやこの一瞬に誰か消え

散骨を考へてをり青岬

揺れをるは水か藻花か夢二の忌

蛞蝓に振る塩持ちて夕映ゆる



空作品抄

柴田佐知子

七夕竹曳きずる音の曲がりゆく
詠まれているのは音だけなのだが、七夕竹の大きさを引
きずられて角を曲がっていく様などが見えてくる。「曳き
ずる音」という省略の効いた技の妙である。

ももいろの頬を潰して昼寝の子
「頬を潰して」の表現がいい。うつ伏せに眠る子の片頬
にそっと触れてみたくなる。ふつくらとしたももいろは幼
児そのものである。

蝉時雨の真中どこに居ようと
一斉に鳴く真夏の蝉時雨。命がけのごとき蝉の声は追い
立てられるように忙しく喧しいものだ。場所を変えてみ
ても、どこもが蝉時雨のど真ん中に違いないと思えるよう
に四方八方から鳴きたてられるのである。

花菖蒲美人といふは首細し
ずばりと捉えたものである。納得する。「美人といふは
首細し」という断定はユーモラスでもある。

夏草や籠に緋の紐つけて
竹で編んだ背に負う籠であろうか。畑に野菜を採りに行
くときなどに担っていたあの籠。そういえば肩に当たる紐
は藍色の布で編まれていた。強い日差しと草いきれがよみ
がえってくる。「紺の紐つけて」の具象の力だ

八方に青嶺めぐらす祝膳
堂々たる句である。際やかな遠近の対比と「青嶺めぐら
す」という大振りな表現が秀抜。

容赦なく犬歯削がる酷暑かな
「犬歯」「削がる」「酷暑」と、まさに容赦のない言葉が
選択されている。それらが相互に強く響きあって、免れが
たい暑さを伝えている。

老仕度盆をすませてからのこと
今号の晨子さんの句は粒ぞろいである。ことに掲句の心
にしみる情感と、深さは格別である。他にも「川渡御にを
とこありけり白法被」の切れ、「もう履かぬ履けぬダンス
の靴の黴」「永き日の山羊が笑ふといふ話」の軽やかさ、「丹
田に受けし滝音持ち帰る」の骨太の把握：句の幅が広く自
在である。一回り大きく進まれたようだ。今後がますます
楽しみである。

牛蛙の声に一戸の沈みけり
まさしく牛のような声で鳴く牛蛙。その音量は不眠症に
なるという人もいるほどに大きい。「沈みけり」によって、
牛蛙の声が響く闇が、覆いかぶさるような量感をもって
迫ってくる。

曙や十葉の白総立ちに
〈じくくだみや真昼の闇に白十字 川端茅舎〉とあるよう
に十葉は湿った庭の隅などに真つ白い四弁の笹を開く。涼
さんの十葉は夜明けのもの。群れて咲く十葉の清楚な白さ
が「白総立ちに」と鮮やかに詠みとめられている。(以下略)

空集

柴田佐知子選

川渡御にをとこありけり白法被
夫の名がまだ生きてをり祭寄付
もう履かぬ履けぬダンスの靴の黴
永き日の山羊が笑ふといふ話
丹田に受けし滝音持ち帰る
帰省子へ呑み込むことば多かりし
わが影と行くほかはなし炎天下
蜘蛛の圍へ真正面という不覚
老仕度盆をすませてからのこと

行橋

安武しんこ晨子



今年竹墓標の位置に刺されけり
麦秋や瓦の赤き醸造所
睡蓮の水は地獄を蔵しけり
藤は実に父に終生怒声なし
柵田畦塗つて一番星を出す
沖繩忌太郎次郎も命みことにて
とまらせて乳房を点す螢かな
万緑や三步あるいて母の胸
夏座敷戦車のごとく嬰が這ふ
雲間より一直線に滝落つる
神の在す滝にためらひなかりけり
滝壺を隠してをどる水しぶき
登り来て氏子総出の山開き

福岡

吉村撰護しんご

東京

田島洋子